

表現教育における効率性と確実性の追及
-日本語教育システムの開発を例として-

岩崎美紀子
(岩崎言語教育プログラム開発)

大岩元
(慶応大学)

高度情報化社会、インターネットの時代を迎え、表現能力、特に英語で話したり、書いたりできる人材の育成が急務であるにもかかわらず、日本の英語教育は残念ながら未だにその任を期待できる状況にない。3年もの義務教育期間がありながら、その間に簡単な会話能力さえ身につけさせることのできない非効率性、非確実性はぜひとも改善の必要がある。本稿では、少なくとも日本語教育においては最短24時間で文レベルの表現能力を身につけさせることが可能であることを示し、その文法理論や工夫の数々を紹介することによって日本人の英語教育法改善の可能性と方向性を探る。

How to achieve speaking and writing ability
more efficiently and effectively
-A case study of a Japanese teaching system-

Mikiko Iwasaki
(Iwasaki Language Program Development)

Hajime Ohiwa
(Keio University)

In this paper, authors show the fact that the sentence-level speaking and writing ability can be achieved through a minimum of 24 hours of private lessons in the Japanese language. Through the case study of the Japanese teaching system, authors are able to give some hints and ideas which can be applied to the field of English education to make it more efficient. Actually, there are few Japanese students who become able to speak English even after three years of compulsory education.

1. 目的

高度情報化社会を迎えて今日本が必要としているのは、情報を受け取るだけでなく発信できる人材であろう。つまり出来上がったものを分析、観賞するだけではなく、自分でものを考え、作り出し、それをなんらかの形で表現できる人材である。それは語学教育の分野で言えば、言語習得に必要な4つの技能のうち、読む、聞くといった受け身の能力ではなく、話す、書くといった能動的な能力をもつ人材ということになる。しかるに、英語教育を見れば分かる通り、少なくともこれまでの日本の教育方法はそうした人材を育てることに成功していない。本稿では日本語教育の分野で一定の成果を出している教育システムを紹介することによって、とりあえず英語教育法改善の可能性と方向性を示す。

2. MISJ

MISJ (Mikiko Iwasaki's Systematic Japanese)は岩崎の開発した日本語教育システ

ムである。効率良く確実に日本語を身につけさせられると同時に、初期教育を確実に行える教師を短期間で養成できる。MISJの効率性と確実性を具体的に示す前に、MISJの言語観、文法観、言語教育観を紹介しておく。なぜならMISJの文法理論は、赤ん坊と同じ言語能力ゼロの状態を出発点としている点で、また完全に話し手の視点から言語を見ている点で、いわゆる英文法、国語文法、生成文法などとは大きく異なるからである。

2. 1 MISJの言語観

言語は文の集まりである。文は情報の集まりである。情報は、語（日本語で言う動詞、名詞、形容詞）を変化させることによって、或いは語に別の要素（助動詞、前置詞、後置詞など）を付け加えることによって作られる。

語（動詞、名詞、形容詞） ⇔ 情報

Σ情報 ⇔ 文

Σ文 ⇔ 言語

言語の違いは、まず情報の作り方に現れる。語を変化させるのか、別の語を付け加えるのか、付け加えるとすれば語の前か後かなど、その方法論が異なる。（ここでは言語間の音声の違いは自明のこととする。）

英語	日本語
語 → 情報	語 → 情報
I	私 → 私は
study → be studying	勉強する → 勉強している → 勉強しています
Japanese	日本語 → 日本語を / 日本語が
school → at school	学校 → 学校で
speak → can speak	話す → 話せる → 話せます

また、文を作るにあたっての情報の組み合わせ方、つまり語順が異なる。

日本語 わたしは毎日学校で日本語を勉強しています。
ですから日本語が話せます

英語 I am studying Japanese at school everyday.
So, I can speak Japanese.

文は3種類あり、それぞれ言語生活のなかでまったく異なった役割を果たす。

(1) 動詞情報を伝える文（MISJでは動詞文と定義）

人や動物の動作や世の中のできごと、自然現象などを伝える。また、願望を述べる、依頼をする、といった様々な機能を発揮することができる。

(2) 名詞情報を伝える文（MISJでは名詞文と定義）

人、物、場所、時そのものについて、それぞれ「誰なのか」、「何なのか」、「どこなのか」、「いつなのか」といった情報を伝える。

(3) 形容詞情報を伝える文（MISJでは形容詞文と定義）

人、物、場所、時の様子、人の感情、感覚、あるいは人がある物や出来事に対してもった印象などを伝える。

文は大きく3つのレベルに分けることができる。例えば最も複雑な構造をもつ可能性のある動詞文は、次のような形で複雑化していくと考える。

レベル1	核となる動詞情報に、名詞をもとにした情報をいくつか組み合わせた文 例 水曜日に／うちで／ケーキを／食べました。
レベル2	レベル1の文に含まれる名詞や動詞を、名詞、形容詞、副詞などの語で修飾した文 例 先週の・水曜日に／田中さんの・うちで／おいしい・ケーキを／たくさん・食べました。
レベル3	レベル1の文に含まれる名詞を文で修飾した文 例 大雪の降った水曜日に／田中さんが新しく建てた・うちで／田中さんの奥さんが焼いた・ケーキを／食べました。

この3つのレベルの文を間接的に、あるいは直接的に2つ以上接続することによって、さらに複雑な構造へと発展する。

間接的な接続 例 鈴木さんとテニスをしました。それから食事をしました。

直接的な接続 例 鈴木さんとテニスをしたらお腹がすいたので着替えてから一緒に食事をしました。

また、文は会話や文章の流れの中では生きており、話し手の思惑や興味の移り変わりによって自在に姿を変える。例えば日本語の場合は、助詞の使い方と語順に変化が起きる。

例 机の上に本がある。→ 本はどこにある(?)。

りんごを食べる。→ りんごは食べるがみかんは食べない。

2. 2 MISJの文法観

語学教育法を論じるとき、「文法(grammar)」は、語をどのように情報化するか、情報化された語をどのように文として組み立てるか、語をどのように修飾するか、文をどのように接続するか、文をどのように会話の中で変化させるか、その方法論ととらえるべきである。このような「文法」は各言語固有のものであり、しかも従来の文法が、例えば母国語話者の直感として、あるいは問題の先送りをする形で、分析を怠ってきた部分をも説明することができる。

2. 3 MISJの言語学習及び言語教育観

単なる語の羅列は少なくとも学ぶ価値のある言語とは考えない。言語学習の目的はあくまでも文レベルの会話力及び読み、書き能力の習得であり、すべての能力をバランスよく身につけるのが理想である。文レベルの言語能力獲得の過程はすなわち「文法」習得の過程であり、それは恐らく母国語習得の過程と重なる。したがって、類推が不可能なほど学習言語と母国語の「文法」差が大きい場合は、費用対効果を考えると、「文法」を妥当な期間内に自然に身につけることは期待できない。つまり表現能力の獲得を重視し、なおかつ効率性を求めるなら、「文法」の学習は必須条件である。

3. MISJの効率性

以上の言語観、文法観、言語教育観に基づき、最小の努力と時間（費用）で効率的かつ確実に表現能力を獲得させることを目標に開発されたのがMISJである。MISJは3つの基本プログラムで構成されている。それぞれのプログラム修了後に期待できる表現能力のレベルは次の通りである。括弧内の数字はそれぞれのプログラム修了に要する最短レッスン回数／時間／期間である。ただし「INTERMEDIATE PROGRAM」についてはまだ速習の形で実行したことがないので、最短どのくらいの期間で妥当な成果が得られるかはっきり示せない。

WELCOME PROGRAM	相手の言うことは十分理解できないが、自分から働きかけることによって生活上の必要を最低限満たせる(12/24/2.5週)
NOVICE PROGRAM	教師以外の日本人とも日常的な話題について双方向で会話ができる(42/84/ 2.5 か月)
INTERMEDIATE PROGRAM	日常的あるいは簡単な社会的な話題について、状況説明なども含めよりまとまりのある会話ができる(50/100)

このうち本稿では「WELCOME PROGRAM」の効率性を具体的に示す。

「WELCOME PROGRAM」は、ゼロから日本語を学ぶ人を対象とした導入用プログラムである。媒介語の使用を前提としており、プライベートレッスンの場合、平均12回、24時間のレッスンで修了することができる。レッスンの内訳は、発音、アクセント関連が2時間、名詞文関連が8時間、動詞文関連が6時間、形容詞文関連が6時間、総復習が2時間となっており、清音だけであるが文字の学習も一応体系的に組み込まれているので、学習者に意欲があれば文を読んだり書いたりもできるようになる。

定期的にレッスンを受け、きちんと復習すると、前半6回のレッスン終了後には挨拶、自己紹介、電話番号と住所の言い方、聞き方、最低5桁までの数字の読み方とお金の教え方、買い物や注文の仕方などの実用表現の他に、自分及び家族の日常生活について話したり、質問したり、質問に答えたりできるようになる。また文字を書く練習を自発的に行えば作文も書けるようになる。次の例は12時間終了後の宿題として学習者が書いたものである。授業で習ったことを自分なりに発展させているので語彙など多少難はあるが、文レベルの表現に必要な「文法」は正確に理解していることが分かる。（文字の学習に関しては[5.2.6] 参照。）

わたしの Iyo おしん は finlandojin です。ははの なまえは mariタです。
 かいsha いんです。わたしの ちち、Veサも かいsha いんです。あには gaくせい
 です。なまえは Ville です。まいあさ gakkooに いきます。Iyo おしん は
 かいsha に いきます。
 まいあさ Ville は yoghurtを たべます。ちちは コーヒーを のみます。
 pan を たべます。ははは ???を たべます。わたしも コーヒーを のみます。
 pan と yoghurt を たべます。
 yolu ははは piアノを します。televiを mimas。ちちは igilisgoの
 benkyoを します。doyoobi セイmajokiに いきます。ははと Villeと わたしは
 dapaトに いきます。ちちは depaトには いきません。

名詞、動詞の学習に続けて形容詞の学習を行うことによって、22時間終了後には旅行について感想も交えて話したり、質問したり、質問に答えたりできるようになる。つまり、この時点で[2.2] で示したレベル2の名詞文、動詞文、形容詞文を作り、かつ会話の中で操れ

るようになる。次の例は22時間修了後の宿題として同じ学習者が書いたものである。

kyo neん lyo こうを しました。フランスと イギリスと ドイツに いきました。
Oxfordで Fish & chipsを たべました。(おいしくありませんでした。)

Londonで Turkish lyoo りを たべました。おいしかったです。Londonで
Nelson Mandela を みました。

パリで Tower Eiffelを みました。Louvreと Sacre coeurも みました。
フランスlyooりが たべたいでした。でも McDonald'sに いきました。おいしく
ありませんでした!

Pragで インドlyooりを たべました。おいしかったです。ともだちと
Charles' bridge と The castle of Pragに いきました。とても きれいでした。
Pragは とても たのしいところでした。

4. MISJの確実性

「WELCOME PROGRAM」は年齢も国籍も様々な60名以上の学習者に対し実践済みである。ただし毎日レッスンが受けられる学習者はあまり多くなく、たいてい週1回2時間のプライベートレッスンである。しかもその大部分は、長期休暇、出張、その他の事情によりなかなか定期的にレッスンを受けることができない。にもかかわらず、8割以上が12回のレッスンでこのプログラムを修了し、修了テストで教師と30分以上日本語での会話を楽しめるだけの表現能力を身につけることができた。十分な成果が得られなかったのは、レッスンが滞りがちな上にレッスン後の復習が全くできないほど忙しい場合で、当然宿題もしないし最低限の語彙の習得もままならない状況だった。しかし、それでも個々のレッスン終了時点では全員が会話可能な状態になる。したがって、少なくとも話す力に関してはシステムの確実性が十分証明されていると考える。高校生以上、20才代までの若い学習者を、学習に専念できる環境で3週間預かることができれば、100%成果を保証すると言い切れるほど完成度が高い。

5. MISJに見られる効率性、確実性を高めるための工夫

5. 1 表現能力を効率よく身につけさせるための工夫

表現能力を効率良く身につけさせるには、まず目標とするレベル到達に必要な「文法」の全体像を正しく見極める必要がある。MISJの場合はまず目標として教師以外の日本人とも双方向の会話ができる表現能力を設定した。結果的に見て、この目標設定は極めて正しかった。目標をもっと高く設定していたら、既存の英文法、国語文法、生成文法と同じことになり、複雑すぎて基本的な「文法」の見極めが難しくなっていたに違いない。逆にもっと低く設定していたら、それより先の学習の効率性までは保証できなかったと思われる。

ある程度まとまった量の「文法」が見極められたら、次に重要なのは学習順序の見極めである。表現能力は少しずつ段階的に積み上げていくしかないからである。もっとも効率のよい学習順序を見極めるポイントは次の通りである。

- (1) 難易度：易しいもの、単純なものを優先、難しいもの、複雑なものは段階的に
- (2) 実用性：難易度に差がない場合は、より実用性の高いものを優先
- (3) 応用性：応用範囲の広いものを優先

学習順序の見極めは次のテーマである確実性を高めるためにも重要である。

5. 2 表現能力を確実に身につけさせるための工夫

5. 2. 1 知識の混乱を避けるための工夫

一定量以上の文法知識を確実に身につけさせるためには、できるだけ知識の混乱を避けなければならない。その目的で、MISJでは名詞、動詞、形容詞を明確に切り離し、別々に段階的に導入する方法をとっているが、結果的に見て非常に有効である。またMISJでは予めシステムにREVIEWレッスンを組み込み、整理能力の劣る学習者でも節目ごとに確実に知識の整理ができるようになっている。

例	L3	名詞を名詞で修飾する方法	NOUNのNOUN
	L8	形容詞で名詞を修飾する方法	イADJ・NOUN/ナADJ なNOUN
	REVIEW	名詞の修飾法	NOUNのNOUN/イADJ NOUN/ナADJ なNOUN

5. 2. 2 記憶を助けるための工夫

表現能力を確実に身につけるには学んだ「文法」を記憶する必要がある。少しでも記憶の負担を少なくし、確実性を高めるために、MISJでは可能な限り「文法」を単純明快なパターンもしくははルール形で与える。この方法は、レッスンで学んだ限られた知識を創造的な発話、作文という形で自発的に発展させられるという点でも非常に有効である。

例	OBJECTを	VERBますか？	/はい、(OBJECTを) VERBます
			いいえ、(OBJECTは) VERBません

5. 2. 3 記憶を定着させるための工夫

表現能力を確実に身につけるにはレッスンで一時的に記憶した「文法」を常に活用できる状態しておく必要がある。記憶が定着し、理想的には無意識のうちに使いこなせるようになるまで、学習者は「文法」を常に復習し続けなければならない。[5.2.2]で紹介した「文法」のパターン化、ルール化は、復習がしやすいという意味でも非常に有効である。

また、MISJでは身につけにくい「文法」は否応なく復習できるように設計されている。

例	「てFORM」変換ルールを確実にマスターさせるための工夫		
	L14	Vてください、Vてくださいませんか？	(V=VERB in「てFORM」)
	L15	Vている	
	L16(1)	VてV、VてからV、Vてみる	
	L16(2)	Vてくる、Vていく、Vておく、Vてしまう	
	L17(1)	あげる、もらう、くれる	
	L17(2)	Vてあげる、Vてもらう、Vてくれる	
	REVIEW	「てFORM」の応用表現のまとめ	
		人に関する情報のまとめ (PERSONと・PERSONに・PERSONを・PERSONから)	

5. 2. 4 やる気を持続させるための工夫

表現能力を確実に身につけさせるには、ある程度の期間積極的に学習を続けてもらわなければならない。それには学習者のやる気を持続させるための工夫が必要である。MISJでは個々の「文法」のもつ機能に着目し、もっともふさわしい会話のテーマと結び付けた形でレッスンが設計されている。すべての「文法」学習が、必ずなんらかの表現能力の獲得という形で終了するため、学習者は表現能力の伸びをレッスン毎に実感することができる。

例	L3	1桁の数字	: 電話番号を聞く、答える
	L4	数字	: お金の数え方: 買い物の仕方
	L5	動詞の現在形	: 日常生活について話す、質問する、答える
	L6	動詞の過去形	: 旅行について話す、質問する、答える

また、各レッスンの内容が学習者の許容量を越えないように、しかも期待する機能を最低限満たすに十分な量になるよう配慮してある。どうしても1回のレッスンで賅えない場合はプログラムの中で、あるいはシステムの中で段階的に学べるよう工夫してある。

数の学習	ORIENTATION	1～10
	L3	1～99：電話番号、住所
	L4	100～999：お金の数え方：注文 1000～大きい数：お金の数え方：買い物
道順の説明	WELCOME	～までお願いします、etc.
	NOVICE	～まで行ってください、etc.
	INTERMEDIATE	～まで行くと～がありますから、そこを右に…

さらにMISJではレッスンを進める上でどうしても必要な語彙、すべての学習者に共通して重要と思われる語彙、学習者が固有に必要な語彙を除いて、語彙の暗記を強要しない。使いたい語彙は必要なときに自分で調達しながら、意味がわからないときは相手に聞きながら会話を進めることを奨励している。語彙力がなくても、「文法」さえ身につけていれば、早い段階から創造的な会話が可能になるのは[3]で述べた通りである。MISJではごく初期のレッスンで語彙調達、意味確認の表現「～は日本語／英語で何といいますか」を導入、「WELCOME PROGRAM」修了時までには必要に応じて完璧に使いこなせるように訓練する。

5. 2. 5 会話力を確実に身につけるための工夫

話す力と聞く力では、話す力の方が短期間に養成可能である。ただし、話す力を確実に身につけるには音声面での訓練が不可欠である。MISJでは、新しい語彙を導入するためのドリル、助詞の使い方を会話の流れの中で習得させるためのドリル、数の表現を習得させるためのドリルなど、日本語教育用の特別なドリルを確立し、経験の多少にかかわらず誰でもが必要かつ十分な訓練を確実に行えるよう工夫されている。

またMISJでは可能な限り質問と答えを組み合わせる形で導入し、ドリルも双方向の形式で行えるよう工夫されているので、一方的に話すだけではなく、質問したり、質問に答えたりすることもできるようになる。結果的に聞く力も確実につく。

例 OBJECTを VERBますか？

はい、(OBJECTを) VERBます／いいえ、(OBJECTは) VERBません

発音の指導は、平仮名やカタカナの読み方の指導を兼ねて「WELCOME PROGRAM」から「NOVICE PROGRAM」にかけて体系的に行えるようになっている。

5. 2. 6 書く力を確実に身につけるための工夫

書く力を身につけるには文字の学習が不可欠である。日本語の文字は3種類ある。それぞれが異なる役割をもち数も多い。大部分の学習者にとってすべての学習を同時に開始すると荷が重すぎるので、MISJではとりあえず仮名の学習から入る。学習者の意欲が高い場合は平仮名とカタカナを同時に教えるが、より利用範囲の広い平仮名を優先し、特に平仮名の読みは必修項目となっている。学習者の負担を軽減するため、とりあえずの道具としてローマ字を使用し、学んだ順にローマ字を外す方法をとっている。([3]で紹介した作文を参照)

例 ashita→あshita →あしta→あした

漢字の学習は仮名文字の学習が修了した後になる。

6. 結論

MISJに照らしてみると、英語の教育法にはまだまだ改善の余地がありそうである。日本語のように24時間で文レベルの会話力を身につけるのは無理としても、少なくとも義務教育の3年間で得られる成果を大幅に改善できる可能性はある。まず効率性を高めるにはこれまでの教育法のよりどころとなっていた文法理論の見直しが必要である。なぜなら、既存の言語資料の分析をもとにしたこれまでの文法理論は、いわば聞き手、読み手側の視点から生まれたもので、話し手、書き手側の視点が不足しているからである。例えば、通常の英文法では文を [SVC]、[SVO] などすべて動詞文として扱うが、英語にもMISJという名詞文、形容詞文の役割を担う文があるはずである。また、動詞に付加される情報のうち目的語だけが特別扱いされているが、話し手にとっては目的語以外の情報も同様に重要である。例えば「何を」以外に「いつ」「どこで」「誰と」程度の情報が処理できなければ「食べる」こと一つとっても満足な会話はできない。このように、MISJと同じ視点でざっと見直すだけでも検討課題がいくつかみつかる。

話し手、書き手の視点から英語を見直すことによって、恐らく日本語と英語の違いが今より明確になる。そうやって初めて英語の表現能力を身につけるための鍵となる「文法」を見極めることができる。その見極めができればそれに応じて学習順序の見直しが可能になる。学習順序を見直すことによって、学習が容易になり、恐らく効率性も確実性もかなり高まるだろう。何が易しく何が難しいか、それは英語との「文法」差の小さいヨーロッパ言語話者と差の大きい日本人とは異なるに違いない。日本語との「文法」差が最も大きい「be動詞」を含む文の学習から始める従来の教育法が、初期段階で多くの脱落者を生む原因である可能性は高い。

MISJに照らしてみると、従来の文法中心の英語教育法はある意味で間違っていない。問題は、文を作るための、また文を会話の中で操るための「文法」が見極められていないこと、そして文法学習が単なる文法学習に終わってしまっていることにある。「文法」を、理解するための道具としてではなく、表現するための道具ととらえなおすことによって、レッスンごとに表現能力の伸びが実感できるようなプランを立てられるようになるに違いない。

最後に、「文法」を軽視する最近の教育法の流れは、少なくとも日本人の英語表現能力をかえって後退させる可能性が高いことを指摘しておきたい。[2.3]で述べた通り、母国語との「文法」差が大きい場合、表現能力の獲得には最低でも母国語獲得と同じ期間が必要である。しかも母国語獲得と同じ環境は望めず、母国語の干渉も加味しなければならないとなると、どれだけ時間がかかるか、果たして可能かさえもわからない。ちょっと話せる程度の会話力ならともかく、自分の考えをきちんと文レベルで相手に伝えられるような表現能力を身につけるには「文法」学習が必須条件であることを明言しておきたい。

参考文献

- 日本語の文法を考える 大野晋著 (1978) 岩波新書
基礎日本語文法—改訂版— 益岡隆志・田窪行則共著 (1992) くろしお出版
日本語のシンタクスと意味 第I巻 寺村秀夫 (1982) くろしお出版
日本語の分析—生成文法の方法— 柴谷方良著 (1978) 大修館書店
認知文法論 山梨正明 (1995) ひつじ書房
ニュークラウン1 (三省堂版) 準拠 SONY CD リピーターテキスト